

祇園祭占出山の隅田八幡神社人物画像鏡図の前掛

磯野 浩光

1

祇園祭は京都のみならず日本を代表する夏の風物詩である。建築、彫刻、絵画、工芸などの多方面の分野の総合芸術である山鉾が、都大路を巡行する様子は「動く美術館」とも表現されている。^(注1)この祭礼

は、平安時代の御霊会に始まり、応仁の乱などの戦乱による中断やたびたびの大火によって被害を蒙ったが、そのつど復興され、より豪華さを備えてきた。日本三大祭りの一つであり、現行32基の山鉾のうち29基は、国の重要有形民俗文化財に指定(昭和37年5月23日指定)され、山鉾行事は、同じく国の重要無形民俗文化財に指定(昭和54年2月3日指定)されている。また、鶏鉾、鯉山、浄妙山、芦刈山、函谷鉾、橋弁慶山の6基の山鉾の毛綴、胴丸等の工芸品6件は、各々単独で重要文化財にも指定されているのである。



各々の山鉾にはそれぞれ

写真1 占出山(財団法人祇園祭山鉾連合会、占出山保存会提供)

由緒、来歴があるが、神功皇后の人形を御神体とする占出山(写真1)は、安産に御利益があり、安産のお守りを授けるとして、多くの人々の崇敬を集めている。御神体に多くのさらしを巻いて巡行し、のちに安産の御腹帯として授与するのである。江戸時代初期から、女院や貴族の姫君などが安産を祈って、この山に多くの小袖や打掛、水干などの衣裳を寄進しており、今も宝物として保存されている。宵山の夜には、京都市中京区錦小路通り室町東入る占出山町の会所で、浴衣姿の子どもたちが、「安産のお守りはこれより出ます。御信心のおん方さまは 受けてお帰りなされましよう。ろうそく一丁献じられましよう。」^(注2)と歌うのである。また、占出山の巡行のくじ順が早いとその年のお産が軽くすむとも伝えられている。安産の腹帯、お守りやお産にまつわる言い伝えは、神功皇后の新羅出兵と皇子出産の伝承に基づいているのである。

この伝承は、『古事記』仲哀天皇段、『日本書紀』仲哀天皇紀、神功皇后摂政前紀に見えるもので、『古事記』、『日本書紀』では少し異同がある。『古事記』によると、仲哀天皇は「熊曾(熊襲)」征討の途中、さらに朝鮮半島、新羅への出兵を計画されるも、筑紫で急逝される。代わって神功皇后が、妊娠中でありながら全軍を指揮して朝鮮半島へ渡り、新羅などを服従させ、日本へ帰還後、筑紫にて無事に皇子(のちの応神天皇)を出産される。また、国内に起こった香坂王、忍熊王の叛乱も鎮圧されるという内容である。さらに、『日本書紀』神功皇后摂政前紀(仲哀天皇9年)4月甲辰条によると、神功皇后は新羅出兵に先立ち、肥前松浦の玉島において神意を占って釣針を川に下ろされたところ、戦勝のしるしとして鮎を釣り上げられたとあり、写真1のように、占出山の神功皇后の人形は、右手に釣竿、左手に鮎を持たれており、山の名の由来となっているのである。

この山は、祇園祭が応仁の乱後に復興した、明応9年(1500)の「祇園會山鉾次第以闡定之」に「十二番、神功皇后山、ニシキノ小路烏丸ト室町ノ間也、」^(注4)と記されているのが文献史料上の初見とされ、安土桃山時代頃からは「占出山」と呼ばれたようである。その他「鮎祝山」、「あゆつり山」、「愛鮎上臈山」などとも俗称されていた。^(注5)また、祇園祭の宵山には占出山の町内で「吉兆あゆ」という和菓子が売られるが、この銘菓も鮎を釣られた伝承によるのである。

祇園祭の各山鉾は、豪華な染織品である前掛、胴掛、水引などによって山鉾の側面が飾られる。占出山のそれは、天橋立など日本三景を描いた綴錦の前掛と胴掛、富士山の綴錦の後掛、中国明末清初の花鳥龍文綴織の見送り、三十六歌仙図の水引であり、各々貴重な工芸品である。その他、巡行には掛けられないが、宵山での会所飾り、常飾りとされている懸装品の一つに、和歌山県橋本市・隅田八幡神社蔵(東京国立博物館保管)の国宝「人物

画像鏡」(国宝の指定名称)を画題とした前掛があるので、ここに財団法人祇園祭山鉾連合会、占出山保存会の御承諾を得て、簡単に紹介することとしたい。

2

占出山のこの前掛については、天保9年(1838)9月刊行の『紀伊国名所図会』第3編巻之2の「隅田八幡宮」の記事(以下、『名所図会』という。)が大きな手がかりとなる。すなわち、

隅田八幡宮 垂井村にあり。隅田莊十六箇村の産生神にて、社頭の壮麗、他の宮の比すべきにあらず。本社(中略)。什寶 古鏡一面。寺僧傳へて神功皇后三韓を征したまへる時、かの土の人 皇后に獻れる鏡といふ。其色青緑にして黄色を含む。縁うすく、背面の紋奇工稠密にして、文字すべて四十九字あり。古體にして讀むべからず。(後略)

とあって、人物画像鏡の克明な模写図が添えられており「廣隆模寫」と注記されている。

さらに、この前掛は、すでに森浩一氏によって次のように考察されている。つまり、古鏡の図柄の前掛は、『名所図会』の人物画像鏡の挿図によって作成されたものである。この図柄は、『名所図会』の古鏡の挿図を拡大したものか、挿図を担当した岩瀬半夢(広隆)から原図を入手したものかはわからないが、幕末か明治初めの京都人が『名所図会』を見て、占出山の飾り物の一つに加えたという知識欲には驚くほかない、とされているのである。^(注6)この優れた分析によって、前掛の画題の由来など歴史的意義はほぼ尽きているのであるが、なお今少し検討を加えてみたい。

まず、この前掛(写真2)は、明治23年(1890)7月に新調されたもので、占出山保存会では「霞に新羅古鏡図」と名づけられている綴織である。他に「綴織新羅古鏡之圖縁狸々緋の前懸」^(注7)、「古鏡裏文綴織」^(注8)などとも記されている。占出山保存会の岸田英雄会長にお尋ねしたところ、胴掛の「三韓人物干潮満潮之図」など同様に朝鮮半島に関する画題の懸装品として新調されたものであるが、占出山の町内で新調したものか、寄付を受けたものか、残念ながら詳しいことは不明とのことであった。ただ、明治23年7月に新調されたことは注5、8の文献にも明記されており確実である。

また、占出山では安永5年(1776)に、「朝鮮館ノ圖」など朝鮮半島に関する前掛が新調されたが、天保2年(1831)には日本の画題の図柄に改められている。^(注9)神功皇后の新羅出兵伝承をもとに、朝鮮半島に関する画題の懸装品が江戸時代に一時用いられており、明治時代中期に再び画題として登場したことがわかるのである。

次に、『名所図会』の古鏡の挿図を描いた岩瀬半夢(小野広隆)は、京都の人で、画家と

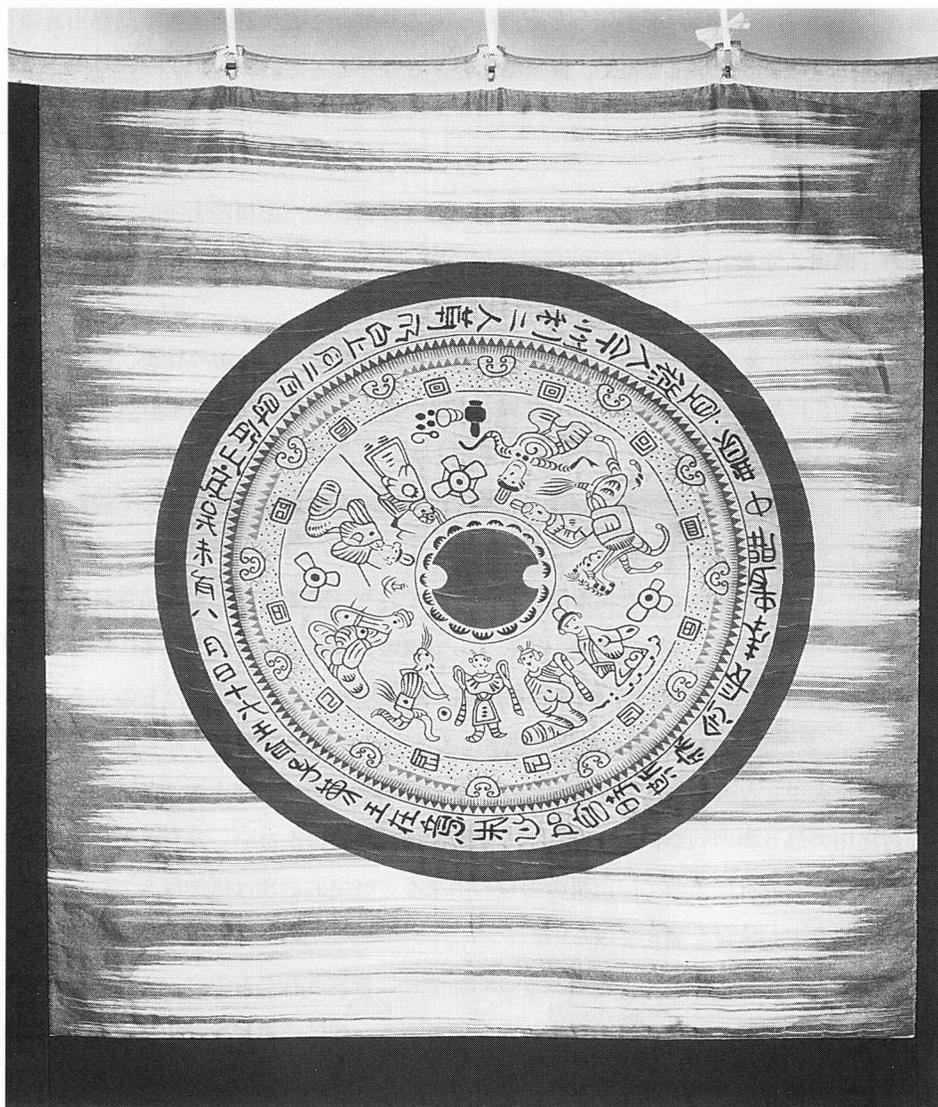


写真2 占出山の前掛（財団法人祇園祭山鉦連合会、占出山保存会提供）

しては菱川清春とも称し、文化5年(1808)に生まれ、天保4年(1833)ごろ和歌山に移り住み、明治10年(1877)8月、和歌山で没しており、墓も和歌山市に存在する。^(注10)没年から前掛の新調までに十数年の隔たりがあり、岩瀬半夢が、晩年に京都との間に往来があったのかは依然不明である。

さらに、森浩一氏はこの前掛の古鏡の図柄は、『名所図会』の挿図と上下左右の位置などが見事に符合するとされているが、前掛の図柄は、『名所図会』の挿図の上下を逆にして描かれており、写真2のように銘文の冒頭が前掛に向かって左中央に位置する。そこか

ら古鏡同様、時計と逆回りに銘文が配置されており、銘文自体も、例えば左文は左文どおりに一字一字でいねいに48文字全てが写されており、銘文を容易に読むことができる。『名所図会』の寺僧の伝えのように、神功皇后と大変ゆかりが深い鏡と考えられていたことから、占出山の前掛の図柄にふさわしく、懸装品の一つに取り入れられたのであろう。また、上下を逆にして図柄としたことから、『名所図会』では読解できないと記された銘文の配置や内容がある程度解釈されていたこともうかがえるのである。

なお、この前掛は、先にふれたように、巡行には使用されてはいないが、会所で宵山などに公開されており、実見することが可能である。

3

隅田八幡神社の人物画像鏡は、日本で铸造されたいわゆる仿製鏡であり、日本最古の金石文の一つである。銘文冒頭の「癸未年」は、443年もしくは503年に比定するのが有力であるが、その他の文字の読み方や解釈には多くの説がある。手本とされた中国鏡(尚方作人物画像鏡)は、大阪府八尾市西車塚古墳、藤井寺市沢田長持山古墳などから出土しているのであるが、この人物画像鏡自体の出土の場所、時期、事情などは不明である。

この点について少し検討してみると、まず天明5年(1785)草稿と奥書のある「隅田八幡宮由来略記」には、「(前略)當宮の寶庫にハ別而重寶と云傳ふる古き神鏡あり、其模様尤常にあらず、是攝州武庫山より來るよし、さるにてや神功皇后の御鏡と云傳ふ、往古ハ御神體とせしこともはかられすとて今ハ神殿に納め奉る、(後略)^(注11)と、天明5年以前からこの鏡が同神社に所蔵されていたことが記されている。先にふれた天保9年(1838)刊行の『名所図会』にも隅田八幡神社の什宝として記載されており、古くから同神社に所蔵されていたことがわかる^(注12)(写真3)。また、天保5年(1834)頃に隅田八幡神社近辺の妻の地から刀剣や土器とともに出土したという言い伝えもあり、天保10年(1839)成立の『紀伊続風土記』には「神寶古鏡一枚あり千數百年を経し物と見ゆ背面に文字四十字餘あり朝鮮の文字も交れり文義通しかたし寺家の説は 皇后三韓にて得給ふ鏡なりといひ傳ふ或は武庫山より奉納せしなりとそいふ」(巻46 垂井村^(注13))

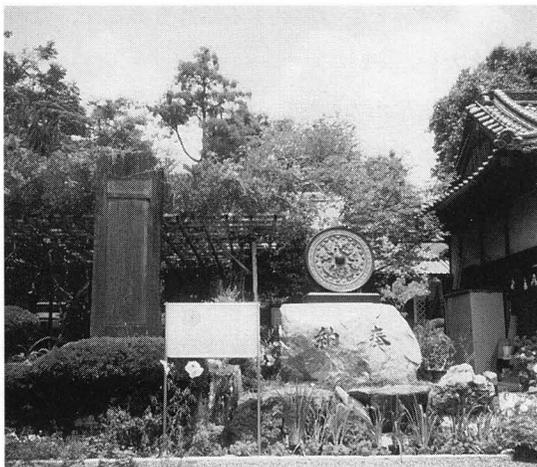


写真3 隅田八幡神社の人物画像鏡頭彰碑

隅田八幡宮の項目)と「隅田八幡宮由来略記」と『名所図会』に見える両説を紹介している。和田萃氏は、古墳からの出土品であることは明らかで、隅田八幡神社の西約3kmに位置する和歌山県指定史跡陵山古墳(橋本市古佐田)が一つの候補となることを示唆^(注14)されている。

以上のように、人物画像鏡の発見や隅田八幡神社の什宝になった経緯についてはやはり明確でない。古鏡及びその銘文が高橋健自によって学術雑誌に紹介されたのは大正3年(1914)10月のことであり^(注15)、古鏡は大正5年(1916)5月、古社寺保存法によって国宝に指定されている(昭和26年6月、文化財保護法による国宝)。占出山の前掛は、明治23年(1890)7月の新調であることから、森浩一氏が指摘されたように、『名所図会』の古鏡と神功皇后が関係するとした記事かその他ここに紹介した近世の文献を読んだ人が、神功皇后の人形を御神体とする占出山の前掛の図柄にふさわしいと考えたのかもしれない。あるいは学術雑誌発表以前に、すでに『名所図会』などの文献によって、古鏡の存在が知られていたのであろう。

また、明治時代中、後期は、日本が富国強兵政策を推し進め、幕末の不平等条約の改正に成功し、アジアの帝国主義列強への道をたどる時代である。その過程で朝鮮半島への圧力を強め、日清戦争(1894年)も起こるのである。神功皇后の新羅出兵の伝承によって、占出山の懸装品には、江戸時代の一時期、朝鮮半島に関する画題が用いられたことがあった。明治時代中期に、神功皇后の伝承にちなんで、人物画像鏡などを図柄とした懸装品が再び新調されたことは、このような時代背景を反映したのではないかとも考えることができる。

その他、祇園祭には同じく神功皇后の新羅出兵伝承を主題に、神功皇后の人形を御神体とし、鉾全体を船の形とする船鉾もあるが、この鉾の懸装品などの検討は後日の課題としておきたい。

以上、占出山の前掛について簡単に紹介したが、祇園祭やひいては京都の文化財の持つ長年の歴史の重みや奥深さを今さらながら痛感せざるを得ない。さらに、祇園祭はさまざまな分野の貴重な史料の宝庫でもあることも実感する次第である。

この拙い文章を書くに際して、財団法人祇園祭山鉾連合会、占出山保存会、同保存会岸田安雄会長、和歌山県教育庁文化遺産課藤井保夫課長、さらに同僚の有井広幸氏、原田三壽氏等の皆様方には、史料の収集、調査等で大変お世話になりました。末筆ながら記して深く感謝申し上げます。

(いその・ひろみつ=京都府教育庁指導部文化財保護課)

- 注1 祇園祭については、植木行宣・中田昭『祇園祭』（保育社）1996年6月、植木行宣『山・鉾・屋台の祭り』（白水社）2001年11月、などを参照した。
- 注2 松田元『祇園祭細見（山鉾篇）』（京を語る会）1977年6月、98頁。
- 注3 『肥前国風土記』松浦郡の条にも同内容の記事があり、『万葉集』巻第5—853から863にもこの伝承をもとにした、大伴旅人の作と考えられている歌がある。
- 注4 『祇園社記』第15「祇園會山鉾事」（『八坂神社記録』上に所収）。
- 注5 若原史明『祇園會山鉾大鑑』（八坂神社）1982年6月、1021頁。
- 注6 森浩一「祇園祭と隅田八幡宮の銅鏡」（同氏『交錯の日本史』朝日新聞社）1990年3月、90頁、（初出は『アサヒグラフ』）。
- 注7 注5、1053頁。
- 注8 京都市『祇園祭山鉾由緒及びその附属品目録』第1集、1969年3月、47頁。
- 注9 注5、1041、1047頁。
- 注10 宮崎十三八・安岡昭男編『幕末維新人名事典』（新人物往来社）1994年2月、144頁（鈴木眞哉文責）。市古貞次ほか『国書人名辞典』第4巻（岩波書店）1998年11月、112頁。なお、『紀伊国名所図会』第3編巻之2の奥付にも「画工 小野廣隆」とある。
- 注11 高野山史編纂所編『高野山文書』第10巻所収、55頁。
- 注12 藤井保夫「国宝「人物画像鏡」」（『定本紀ノ川・吉野川』郷土出版社）2003年7月、77頁。
- 注13 生地亀三郎、金谷克己『紀伊の古墳』1（紀伊考古学研究会）1955年7月、4頁。
- 注14 和田萃『大系日本の歴史2古墳の時代』（小学館）1988年1月、260頁。
- 注15 高橋健自「在銘最古日本鏡」（『考古学雑誌』第5巻第2号）1914年10月。

